若　者

ドイツでの豊かさ、アメリカでの豊かさ

高　部　英　明*

私は大学院修了後，ミュンヘンのマックス—プランク研究所に一年，米国アリゾナ大学に十ケ月滞在する機会を得ました．そこでこの欄をかりて，私という「若者」が生活し，感じたヨーロッパ，アメリカについて少し書いてみたいと思います．

ミュンヘンに着いたのは，80年9月1日，オーバーのほしくなる様な寒い雨の日でした．初めての海外生活を始めようとする妻と私に，この寒さは，緊張感を一層つのらせたものでした．しかし，そんな私達を暖かく迎えてくれた，フィッシャー夫妻（私達を一年間お世話下さった大家さん）の笑顔に接した時から，不安は全て吹飛んでしまいました．

フィッシャー家に落着いた私達は，その日から手厚い親切攻めに会いました．まず，翌日から三日間のバイエルン観光．バイエルン（南ドイツ）の教会，城，自然の美しさをぜひ見せてあげたい，という夫妻にさそわれ出かけました．自分の国，バイエルンをこよなく愛する二人は，訪ねる教会，城の歴史，建築様式，それにまつわる人々の話を熱心に聞かせてくれるのでした．朝は六時朝食で夜は八時過ぎまで，ご主人の運転するベンツで勢力的に各地を案内してくれました．私達，着いて早々，親切はもとより，「遊ぶには体力がいるし，楽しむには努力が必要なのか」とカルチャーショックを感じたのでした．

その後も，機会あるごとにコンサート，バレー，サーカスなどさそってくれたり，友人宅へ同伴していただいたりと，書き尽せぬほどの親切を受けました．又，妻はフィッシャー婦人から編物を教えていただいたり，料理の手ほどきを受けたりと，日常の接触を通して，語学，文化吸収に忙しくも楽しい毎日でした．

筆者の誕生パーティーにて，　左より，
フィッシャー夫妻，妻，一人息子のペーター，友人

私の研究所での生活は，ドイツ人が一般にそうである様に規則正しい毎日でした．朝八時前には仕事を始め，夕方五時前には終了するという研究生活を一日欠かさず続けました．一年の滞在を通して，研究内容として得たものにそれほど目新しいものはありませんでしたが，この様な生活態度や，研究姿勢に得るものが多くありました．

「自分の言葉で納得いかない事はガンとして認めない」，「自分の研究にプライドと自信を持ち，1つのテーマに取組んだら何年でも深く，徹底的に掘りさげていき，充分な時間をかけることにより独創性ある仕事としていく」．この様な態度に，その重要性は認めるものの，始めのうちはドイツ人てガンコで協調性に欠ける人ばかりかと疑問をいだきました．しかし，時がたつにつれそうではないことに気付いたのです．

「人は人，自分は自分」という精神が発達しているのですが，これは，「人には人の方法論がありそれも又，真なり」と認めた上での個人主義と感じられるのです．つまり，真理への道は唯一でなく人それぞれにより異る．自分には

* 高部英明（Hideaki TAKABE），大阪大学，レーザー核融合研究センター，助手，工学博士，プラズマ工学

自分の方法論があり，他人の価値観は認めた上で，自分の信ずる所をプライドと自信を持って実行していく．そして，そうすることにより始めて着実な前進があるのだ，という思想の様です．

また，この様な考え方は，個人のレベルだけでなく，ヨーロッパ内に多くの国が共存していく上での知恵として養われてきたものだと思われました．どうも，「真理への多様性」を認めるという余裕があり，それを支えているのが，精神的，物質的豊かさではないかと思われるのです．

ヨーロッパでの生活をあとに，今度は自然，文化，人間，全てに対称的なアリゾナ州ツーソンに住むことになりました．着いて当初は，あまりの環境の変化に，「何故俺はこんな砂漠の町に好きこのんで来たのだろう」と思ったりしたものでした．しかし，車を手に入れ，高速道路をつっぱしり，グランド・キャニオン，モニュメント・バレーなど，人間があまりにもちっぽけに思える大自然の雄大さに接するにつれ，若いアメリカのエネルギーを吸収し，自分が勇気づけられていくのに気付きました．岩と下草だけの不毛の地に線となって延びる道，そこをどこまでも走っていく自分，広い土地，安いエネルギー，どれをとってもアメリカがねたましく思えるのでした．

アメリカでも多くの人の親切に触れました．まず着いて早々，さてどうしようとボスに電話すると，パットとリンダという若いカップルに我々の面倒を見るよう手配してくれました．アパート探しから車探し，日常品の買出しから食器の世話まで，至れり尽くせりしてくれました．「生馬の目を抜くようなアメリカ社会」で，きびしさを学びたいと思って来たつもりが，結果として，田舎のゆえか親切で暖かいアメリカの一面を見せてもらった滞在でした．研究室では，学生の大部屋に机をもらい，雑談を通して英会話の勉強をさせてもらったり，同年輩のリーラントとの共同研究を通して，彼のバイタリティーに感心したりと，物理以外にも得ることの多い研究生活でした．

アメリカに来て，何故アメリカは豊かなのだろうとよく考えさせられました．安いエネルギー，広大な土地，確かに大きな要素なのですが，それだけではないようです．安いエネルギーを使っての機械力の導入．作業の合理化，合理化のしやすい雇用制度．人間もシステムの一要素としてシステムの最適化を計り，生産性の高上が得られているように思えます．

しかし一方，日米車摩擦で代表される様に，米国車産業の生産性低下による競争力の後退という面も現れてきていますので，すべてが上記通りに今後ともいくとは限りませんが，とにかく，生産性高上で得た豊さゆえ，直接生産に結びつかぬ基礎研究部門への資本投入の余裕が可能となっていると思われます．たとえば，私の専門である核融合研究をとってみても，アリゾナ大学ですら研究の一分野を担当することが許されており，それが，裾野の広い研究社会を支えているのだと思います．そして，この豊かさに支えられた研究分野への投資の余裕が，次の時代に新な富を生み出し，それが国の豊かさを維持していくという，正のフィードバックが見られるようです．

ドイツ，アメリカでの約二年間に及ぶ研究生活の後，現在，阪大レーザー核融合センターで研究させていただいています．回りを見れば，確かに日本は豊かになりつつある様です．しかし，この豊かさが「中近東からのエネルギーの安定供給」という仮定の下に成立していることを思うと，「真理への多様性」を許す豊かさ，「高生産性に支られた社会での研究分野への資本投入」を許す豊かさを，日本において育て，永続的なものにするためにも，核融合実現によるエネルギー自給は不可欠だと結論されるのです．この様な意味においても，私の海外生活は，自分の研究目的に明確な信念を与えてくれる有意義なものであったと喜んでおります．

最後に，この欄への寄稿をお勧め下さった，山中龍彦教授に感謝します．